影

四年　ひな子

あづさゆみ春日の落す木々の葉の影やゝゆれて
風かをり來る
木々の影木々をとひかふ鳥の影ほどよく窓にう
つる朝かな
やはらかき春日の落す木の影を心かろ〳〵今日
もふむかな
てまりつく妹の影のあり〳〵と障子にうつり歌
聲のする
日だまりに影ふみをして遊ぶ子のとよめき聞ゆ
のどかなるひる
木々の影ものゝ影みなうすれゆく夕はさびし鳥
のなくさへ
春の夜のまちのほかげをなつかしみたゞ何となく
くいでて來しかな
その昔よくせしあそび影ふみの思ひ出らるゝよ
き月夜かな
うすながく引ける我影ものゝ影消えて靜に日は
暮れにけり

□　□　□

五月雨

さみだれにぬれし若葉の色見ればたゞ何となく
ものゝこひしき
しみ〳〵と物思ひするわが身にはさみだれ時ぞ
うれしかりける
しめやかにふるきことなど語りあふ五月雨頃の
夜の靜けさ
さみだれの夜の寂しさもわすれけりとなりの家
の三味の音よきに
歌につかれ文にもうみてたゞ人のこひしかりけ
り五月雨の夜は
つゆばれの夕の丘べあかき灯の町をみおろし涙
するかな
しめりたる土の香をかぎつゆばれの林をゆけば
心たのしも
つゆはれの空を仰ぎぬしみ〴〵と嬉しき人にあ
ふ心地して

三年　せつ子

花の中につとゝび入りし紫のことりは夢の我な
りしかな
紫の山につゞきてはつなつの緑ののべのうちひ
ろごれる
初夏の光かゞやく朝の空わがかなしびにかゝは
りもなし
靜けさにうちひたらんと夕まぐれ緑の岡に一人
のぼりぬ
風もなく雲も動かぬ靜けさのまなかに立ちて春
の山見る
滿ち足ゐといふ事しらぬ此頃の我のこゝろのや
ませなきかも
かなしびといふ事知らぬ者のごと君笑み給ふ春
の夕ぐれ
わが歩む麓の道と君あゆむみねの道とはいづれ
まされり
いと遠きものと思ひし光明の世を今我の歩みつ
ゝあり

江の島と鎌倉

二年　C T 子

誰ぞ來り扉をひらけいにしへの右の大臣に涙た
むけむ　（實朝の墓にて）
黑がみを梳く手とゞめてする〳〵と昇る陽を見
る江の島の宿
江の島の島回の波の水色のきぬのべしごとひか
る初夏
極樂寺電車下るれば初夏の日は青葉なす坂の上
に照る
鶴ヶ岡八幡宮のみやしろに鳩もひそみて夕とな
りぬ

初夏

二年　きみ子

少女子の輕き袂に風かほり光あかるき學びやの
庭
桐の花音なく落ちて黃昏るゝ故郷の夏のにほひ
うれしも